

# 名古屋地学会第 290 回例会報告

津村善博

日時：2011 年 9 月 24 日（土） 参加者 3 名

場所：津市美杉町太郎生周辺

内容：

- ・室生火砕流堆積物の観察と採集
- ・俱留尊山や大洞山などの地形の観望
- ・池の平高原の凹地の見学
- ・大洞山周辺の山粕層群の観察など
- ・球状花崗岩の見学

まず、標高約 610m の池の平高原に登り、そこから東にみえる大洞山 (985.1m)・尼ヶ岳 (957.7m) を遠望した。これらの山は室生火砕流堆積物（中新世中期）からなり、侵食により特徴的な山型を呈している（図 1）。西側には俱留尊山 (1037.6m) も室生火砕流堆積物からできていて、東麓が急崖をなしている。

次に池の平高原の成因やその中にできた凹地（図 2）の説明と見学をした。成因としては、高原が崩壊堆積物からできていることから考えて、俱留尊山からの室生堆積物の崩落などによって地形であると考えられている。また、凹地については地すべりによってできたと考えられている。参加者全員で室生堆積物の供給源についての議論もした。高原をおりて、津市美杉町産の球状花崗岩の発見者であるお宅によってそれを拝見して、その後、大洞山へと向かった。そこで室生火砕流堆積物の採集をした。

帰路の途中で、標高 610m ぐらいのところにある段丘堆積物（図 3）と中新世前期の山粕層群（図 4）を観察した。



図 1



図 2



図 3

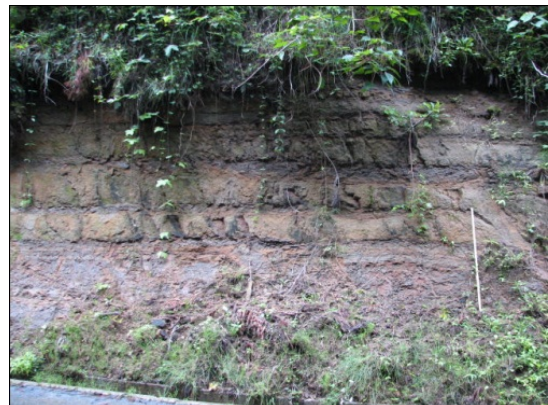


図 4